様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　25 年　6 月　11 日現在

機関番号：３２６３４
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2010～2012
課題番号：22530569
研究課題名（和文）日本人のグラスルーツ・トランスナショナリズムの展開と「場所」

研究課題名（英文）The development of Japanese grassroots transnationalism and the place

研究代表者
廣田　康生（HIROTA YASUO）
専修大学・人間科学部・教授
研究者番号：60208890

研究成果の概要（和文）：本研究の成果は以下のとおりである。(1) グラスルーツ・トランスナショナリズムの研究文脈を整理し、「トランスナショナル・コミュニティ・パースペクティブ」の仮説群を明示したこと、(2) 日本人のトランスナショナリズムを分析する研究枠組に「場所形成（place making)」の概念を組み入れたこと、(3) この研究枠組からの事例研究を実施し、都市社会学のテーマと接合したこと。

研究成果の概要（英文）：The results can be as follows. (1)The theories of migrant transnationalism have reorganized as Japanese grassroots transnationalism theories and the hypothesis embedded in the “transnational community perspective” have been uncovered. (2) The concept of “place making” has been incorporated into the research frame of Japanese grassroots transnationalism. (3)The possibility of joining the research of Japanese grassroots transnationalism with the theme of “space making from below” in Urban Sociology has been opened.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	800,000	240,000	1,040,000
2011 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2012 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総　計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：社会学・社会学
キーワード：トランスナショナリズム

１．研究開始当初の背景

現代のグローバル化が地域社会に提起する問題として、外国人労働者や移民等いわば国境を越えて移動する人々がもたらす人々の就労機会の問題、外国人児童生徒問題、「エスニック・コミュニティ」あるいは「エスニックネットワーク」の形成が提起する既存の住民との軋轢など多文化コミュニティ化がもたらす諸問題、多様性と統合などの問題がある。

ところで、現在の「エスニック・コミュニティ」を取り挙げる場合、それを同じエスニシティからなる閉鎖的なものとしてではなく、国境を越えて広がるネットワークのなかでいわばトランスナショナルな性格を持ったコミュニティとして成立していることを忘れてはならない。だが、ここで言う「トランスナショナルなコミュニティ」とは、単に

国境を越えて抽象的に拡大する情報網のなかに拡散しているコミュニティではなく、移動の「磁場」となる地域に、移動者及び先住者それぞれの「場所」を求める衝突や異質な文化同士の葛藤、そして「共生」への要請に直面し、さらにこれまで「自明視」されていた既存の制度や生き方や価値観の問い直しを要請される現実のコミュニティであることを忘れてはならない。いわば、地域社会におけるトランスナショナリズムの展開は、われわれ日本人に、この状況をどう生き、乗り越えていくかという課題を突き付けているのである。これがまさに本研究の背景をなす緊急の現実的課題である。だが、移民が日常化している欧米諸国では地域社会における多様性と統合の課題が主要な社会的テーマとなっているのに比較して、日本社会においても状況は極めて類似しているにもかかわらず、グローバル化が生み出すこうした現象の社会学的研究は未だ多いとは言い難い。本研究は、大量の移民を抱えたアメリカ合衆国の現実経験の中から生まれた「トランスナショナリズム論」の検討を踏まえ、「日本人（日本）のトランスナショナリズム」研究の「研究枠組」を「トランスナショナル・コミュニティ・パースペクティブ」として整理し、その「枠組」が内包する諸仮説に目を配りつつ、日本発のグラスルーツ・トランスナショナリズム論の理論的検討と事例研究を実施するものである。

２．研究の目的

本研究の目的は二つである。第一点としては、日本人のグラスルーツ・トラスナショナリズムを理解するための「分析枠組」の理論的、現実的検討、が挙げられ、第二点としては、この「分析枠組」を保障しさらに修正する、フィールドでの実態調査の実施が不可欠である。第一点目の、日本人のトランスナショナリズムを分析する枠組みに関する理論的検討、に関しては、一つには、これまでのトランスナショナリズム論が生まれてきた研究的思想的文脈を検討することと、二つ目には、グラスルーツなトランスナショナリズム論の「研究枠組」をなす「トランスナショナル・コミュニティ・パースペクティブ」に内在する仮説を、日本人のグラスルーツ・トランスナショナリズムの「現実」に合わせて再呈示することを意図した。第二点目の、フィールドでの検証と修正と言う点に関しては、①過去と現在における日本人の「グラスルーツ・トランスナショナリズム」の展開を象徴する事例研究を実施し、上記の「研究枠組」の有効性を確かめることを目的とした。

本研究では、以上の目的を実現するために、(1)理論研究編として、日本人のグラスルーツ・トランスナショナリズム論の研究枠組の検討と、(2)事例研究編として、過去と現在における「日本人のグラスルーツ・トランスナショナリズム」の事例研究を実施する計画を立てた。過去の事例としては、明治期日本人移民の「初期トランスナショナリズム」としての再解読、現代の日本社会における「グラスルーツ・トランスナショナリズム」の事例研究としては移動の磁場での「トランスナショナル・コミュニティ」の事例研究、の実施を計画した。最後の結論部分では、(3)結論、として、トランスナショナリズム研究と都市社会学との関係性、に関する三つの研究群を実施することを目的とした。

３．研究の方法

上記のように本研究は、(1)理論編と（2）事例研究編、(3)結論、から構成されるが、(1)理論編におけるグラスルーツ・トランスナショナリズムの検討に際しては、次の二点に注意しつつ検討作業を進めた。第一に、本研究における「研究枠組」とは、純粋に理論的に導出されるものというよりは、むしろ、フィールドでの、日本人の「グラスルーツ・トランスナショナリズム」に関連する諸事実を整理し、表現し、解釈するための「枠組」という立場をとったということである。したがって「研究枠組」と「事例研究」とは常にフィードバックするという考え方に立っている。第二は、事例研究を「方法論的トランスナショナリズム」と「経験的トランスナショナリズム」という二つの研究方法を組み合わせる形で実施したということである。「方法論的トランスナショナリズム」とは、過去の移民に関する歴史的事実やエスノグラフィックな説明を、トランスナショナリズム論の観点から読み直すという方法であり、「経験的トランスナショナリズム」とは、現実のトランスナショナルな諸実践の諸事実や諸事例を聞き取り調査や資料収集し、トランスナショナリズム論の立場から解釈する方法である。本研究の場合、過去と現在の「グラスルーツ・トランスナショナリズム」に通底する特徴を描くことが目的なので、具体的には、明治期布哇日本人移民の事例については、実際の聞き取り調査のほかに「方法論的トランスナショナリズム論」の考え方に立ち、歴史的で、エスノグラフィックな資料も重要な資料として取り上げ、解釈するという方法を採用した。無論、現在の日本社会における「トランスナショナル・コミュニティ」における調査研究は、「経験的トランスナショナリズム」の立場に立ち聞き取り調査を主な方法とした事例研究を実施した。

４．研究成果

本研究は、日本人のグラスルーツ・トランスナショナリズム論の研究枠組を検討した

(1)理論編と、(2)事例研究編、(3) 結論の三つの部分からなる。

(1) 理論編の成果：理論編はタイトルをつければ、「トランスナショナル・コミュニティ」と『場所形成（place making)』―研究の文脈と「枠組」に関する考察―」ということになる（執筆担当廣田康生：この成果の一部は、「5. 主な発表論文等」に掲載の②、④参照)。主な研究成果としては以下の通りである。①本研究の目的に従って、従来のトランスナショナリズム論の中から「移民トランスナショナリズム論」の定義、すなわち「移民がその出身地（origin）と定住地（settlement）の社会とを連結する、複雑に縒りあわされた社会関係を育みそして維持する諸過程」という定義を「グラスルーツ・トランスナショナリズム論」の定義として再確認し、本研究における「日本人のグラスルーツ・トランスナショナリズム論」を、「トランスナショナル・コミュニティ」を生きる人々の研究と位置付けたこと。以上のように考えることで、「日本人のグラスルーツ・トランスナショナリズム」を、グローバリゼーション論とは異なり、「場所」を重要な要素として組み込む「研究枠組」構想の理論的準備ができた。②以上の考察を前提に、「トランスナショナル・コミュニティ・パースペクティブ」を構成する視点のなかに、「場所」研究の新たな視点すなわち「場所形成(place making)」の視点――人々は「場所」をどのように形成し、生きるのか、に注目する視点―を組み込むことが出来た。この結果、「トランスナショナル・コミュニティ・パースペクティブ」を「場所形成（place making)」に関する社会的、政治的な諸過程の研究として呈示することが可能になった。これは、本研究を都市社会学の伝統的なテーマと接合する可能性を開くものである。③「トランスナショナル・コミュニティ・パースペクティブ」に内在する「現実認識」の「仮説」ないし「前提」を、事例研究での結果と相互参照させながら、取り出すことができた。その「仮説」もしくは「前提」とは次の三つである。第一の「仮説」:「トランスナショナル・コミュニティ」は特定の場所に出現すること、第二の「仮説」:「トランスナショナル・コミュニティ」の編成原理の重層性、第三の「仮説」:「トランスナショナル・コミュニティ」は資本の論理とは異なる普通の人々の言わばグラスルーツなレベルでの空間形成に注目するものである、ということである。このことにより、「トランスナショナル・コミュニティ・パースペクティブ」からの研究を、資本の論理とは異なる「下からの（＝普通の人々の)」都市空間形成に焦点を当てるものであるという立場を確認することができた。

(2) 事例研究編の成果：事例研究編は、①「初期トランスナショナリズムにおける場所形成―越境の都市的世界と場所の繋がり、場所の獲得―」（執筆担当廣田康生：成果の一部は「5. 主な発表論文等」に掲載した⑤参照)、②「『移民宿』から見た初期トランスナショナリズムと『場所形成』(執筆担当藤原法子：成果の一部は「5. 主な発表論文等」の③、⑥参照)、③「トランスナショナル・コミュニティの形成と『場所の政治』(執筆担当廣田康生：6 月現在未発表。ただし、廣田の既発表論文を大幅に補筆修正して掲載予定)、④「越境する場所とアイデンティティ―群馬県大泉町の『移民 1.5 世代』の『場所形成」』」（執筆担当藤原法子：ここでの成果は「5. 主な発表論文等」の中の①参照)、⑤「場所形成と『下からの』都市空間形成」（執筆担当廣田康生：この成果の一部は、広田研究室編『2012 年度社会調査実習の記録』としてまとめてある）から構成される。

①は、明治後期に山口県周防大島の属島沖家室（おきかむろ）から布哇に移民し、ホノルル・ダウンタウンの「推移地帯」（アアラ街とカカアコ地区）を中心的な生活の「場所」とした日本人移民の「トランスナショナル・コミュニティ」における「場所形成」の事例である。ここでは「方法論的トランスナショナリズム」特に同コミュニティを「閉じた移民コミュニティ」というよりは「初期トランスナショナリズム」の観点から再解釈を試みた点、そして日本社会ではあまり紹介されることのないホノルルの推移地帯「カカアコ」での日本人コミュニティの実態を紹介できたことである。

②は、同じく布哇ホノルルに移動した日本人世界を、移動を支え「記憶」させる「装置」としての「移民宿」に焦点をあわせ、ここから見えてくる人びとの移動と「場所形成」過程の特徴を、「移動の経験の記憶」という観点から描いた事例調査である。ここでの成果は、①同様「方法論的トランスナショナリズム」の立場に立ってこれまでほとんど研究例がなかった「移民宿」を、「移動の経験を記憶する場所」として新たな位置づけを行い、生存者への丹念な聞取り調査から日本人の「場所形成」過程を描いていることである。

③は、1990 年から日系ブラジル人を外国人労働者として受け入れた群馬県大泉町におけるトランスナショナル化の実態を、町政と組み合わせて時期区分し、あわせて「トランスナショナル・コミュニティ」の形成過程における、日本人住民と日系ブラジル人住民との間での、互いの「場所」の「意味付け」とアイデンティティの「交渉」過程を、「場所の政治」の展開として扱ったものである。この「事例調査」の成果としては、「トランスナショナル・コミュニティ」の形成を地域政治と結びつけて論じた点である。

④は、③同様、群馬県大泉町をフィールドとして、トランスナショナリズム化の段階に応じて、「移動 1.5 世代」がどのように「場所形成」に関わり、場所へのアイデンティティを作り出していったのかに関する事例研究である。ここでの成果は、「移民 1.5 世代」を、親世代・祖父母世代の「移動の経験」と異なる「記憶」を持ち、父母世代と異なる「出処（origin)」に関する意識を持つ人々と定義し、彼らが、地域の外からではなく、「地域内存在」という立場から、ブラジルタウンの形成に象徴される「場所形成」の動向のなかで、一定の影響力を持ちだしたことを問題提起したことである。③の場所の政治の指摘と並んで、日本社会における「トランスナショナル・コミュニティ」の現在を示している点が重要である。

⑤は、都市社会学の分野では有名な新宿大久保及び百人町に形成されているコリアンタウンやイスラム・スポットに焦点を合わせ、ここに形成されている人々の社会的集合および、場所の獲得をめぐる衝突を、「トランスナショナル・コミュニティ」における「場所形成」という観点から、主に聞き取り調査をしたものである。この事例研究の成果としては、第一に、従来「共生」過程に焦点を合わせて行われてきた研究を、それぞれの移民やエスニシティの「場所」への意味付けとその衝突という点に焦点をあてて描いた点、第二に、この聞き取り調査から、「必ずしも居住の近接性に基づかない社会的凝集」としての社会的集合や、領域化を図る人々による、空間形成という、「トランスナショナル・コミュニティ」の重層的な編成様態が提起されている点である。この問題は、本研究の結論、将来への展望として重要である。

(3) 結論と展望の成果：「都市社会学と場所形成論の今後―下からの都市論という構想をめぐって―」（執筆担当廣田康生：成果の一部は、「5. 主な発表論文④参照)。本研究の結論部分では、トランスナショナリズムと場所形成のテーマを、都市社会学特に都市コミュニティ論の提起した課題と接続させつつ考察した。特に、日本人のグラスルーツ・トランスナショナリズム過程は、移動の磁場としての都市的世界の中に、いくつもの「生の物語」やアイデンティティと「場所形成」をめぐる「物語」を紡ぎ出してきた。それは、都市社会学特に都市コミュニティ論と都市エスニシティ論が追究する都市的世界に関する研究課題―特に「下からの都市論」のテーマ―と接続することを問題提起して本書の結語とした。各項目の箇所に、研究の意義については記してきたが、最後に本研究の成果として、①日本人のグラスルーツ・トランスナショナリズムの「研究枠組」を提示したこと、②トランスナショナリズム研究の「枠組」として「トランスナショナル・コミュニティ・パースペクティブ」に内在する仮説を日本人のトランスナショナリズムの現実にあわせつつ、呈示したこと、③上記の理論を担保する「事例研究」とその方法論を明示し、さらに「トランスナショナル・コミュニティ」の編成原理の重層性を、都市コミュニティ研究の新たな方向性として呈示した点は、日本発のトランスナショナリズム研究として、本研究の成果のであると考える（なお、本研究の成果は下記の雑誌論文として報告しているが、全体を書籍にて刊行する予定)。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）
(1) 雑誌論文（計 7 件）

①藤原法子,2013,「越境する場所とアイデンティティ―群馬県大泉町の『移民 1.5 世代』の『場所形成」』」『専修大学社会科学研究所　月報』599 号（投稿中：6 月刊行予定：査読無）.

②廣田康生,2013,「トランスナショナル・コミュニティ・パースペクティブの諸仮説」『専修人間科学論集　社会学編』Vol.3,No.2,P.71-80(査読無).

③藤原法子,2012,「回路的世界を繋ぐ装置としての『移民宿』―横浜ホノルルを繋ぐ移動の経験の記憶―」『専修人間科学論集社会学篇』Vol.2,No.2,P.155-167(査読無)

④廣田康生,2012a,「日本人のグラスルーツ・トランスナショナリズムと場所への都市社会学的接近」『専修人間科学論集　社会学篇』Vol.2,No.2,P.141-154(査読無).

⑤廣田康生,2012b,「越境の都市的世界と場所への繋がり、場所の獲得―沖家室とホノルル・アアラ及びカカアコの越境者たち―」『専修大学　人文科学研究所月報』第 255 号. P.1-27（査読無）.

⑥藤原法子,2011,「移民宿に見る都市横浜」『専修人間科学論集　社会学篇』Vol.1,N0.2,P.157-162（査読無）.

⑦廣田康生,2011,「共生論と初期シカゴ学派エスニシティ研究」『専修人間科学論集社会学篇』Vol.1,No.2,P.145-156（査読無）.

６．研究組織
(1)研究代表者

廣田　康生（HIROTA YASUO)
専修大学・人間科学部・教授
研究者番号：60208890

(2)研究分担者

藤原　法子（FUJIWARA NORIKO)
専修大学・人間科学部・准教授
研究者番号：60573300